

R. D. レイン家族研究における、認識方法をめぐる理論的転調  
— “comprehension” から “intellection” へ—

立命館大学大学院 社会学研究科  
藤本美貴 FUJIMOTO, Yoshitaka  
(trichromatic@live.jp)

## 1. 問題

統合失調症<sup>1</sup>と診断された患者の体験や行動は、いかにして理解可能となるのか。この素朴かつ根本的な問題に対して、実存的—現象学的観点を手がかりにその認識方法を追究した人物の一人に、イギリスの精神医学者・R.D.レイン（1927-1989）の名が挙げられる。本報告では、彼の初期の作品群、具体的には代表作『ひき裂かれた自己』（Laing, 1960→1964=1975）から、その後展開された『狂気と家族』（Laing & Esterson, 1964=1971）を中心とする一連の家族研究までの時期に主に着目し、その中で認識方法をめぐるいかなる転調が経験されていたかを問題にしたい。

筆者の目からすると、大きく分けて二段階の理論的転調が入れ子のような状態で経験されていたものと思われる。第一の転調、それは W.ディルタイ解釈学を基礎としつつも、そこに J.P.サルトルの全体化論を摂取することで遂行された、‘comprehension’から ‘intellection’ という認識方法への抜本的転調である。これによってレインは、患者の行動や体験（＝「実践」）およびその「意図」へのディルタイ的追体験のみならず、それが「家族」という空間の中でいかなる疎外を経験し、全体化されていくかという観点にも認識の矛先を向けることが可能となった。

しかし重要なのはその次である。レインはそうした第一の転調の只中で、「意図」というモメントの処遇を起点とする看過できない第二の転調を、複数のテキスト間を跨ぐ微妙な言い換えを通じて暗に提示しているのである。それは、①創造的原点たる「実践」の水準においてすら、「意図」を根絶しようとする疎外の侵入可能性が指摘されるということ（つまり、‘comprehension’の契機を完全に無効化するほどの疎外が作動するという）、そして、②その背景には、家族成員全体によって半ば空想的に運営される集団的「実践」ともいべき存在が横たわっているということ（＝‘nexus’という集合体）、さらに、③この集団的「実践」の欺瞞性によって、表面的にはあたかも、患者当人の創造的原点たる「実践」および「意図」への遡及が可能であるかのように映し出されるということ。以上三点を提示するものであった。

この二段階の転調は、サルトルの全体化論に対していかなる発展の可能性を提示するものであったのか。さらには、同時代に欧米を中心として活発化した、統合失調症をめぐる家族精神医学という潮流の中で、いかなる独自の位置を占めていたのだろうか。

---

<sup>1</sup> 日本では、2002年に日本精神神経学会の提唱によって「精神分裂病」から「統合失調症」へと呼称が変更された。本報告ではそれに従い、「統合失調症」という表現を統一して使用する。

《キーワード》comprehension\*、intellection\*、実践、意図、疎外、欺瞞

\*日本語訳の際、comprehensionには「了解」を、intellectionには「知解」（関連語であるintelligibilityには「可知性」）をそれぞれ充てる

## 2. 第一の転調— ‘comprehension’ から ‘intellection’ へ

### (1) 『ひき裂かれた自己』における‘comprehension’

議論の出発点となる『ひき裂かれた自己』では、主に「患者と治療者」という二者関係、すなわち「治療室」という空間において治療者が目指すべきものとして、‘comprehension’ という認識方法が用いられている。それは、患者本人の「諸行動を、その人（＝患者：引用者注）がわれわれとともにある状況を体験する仕方と結びつけて考える」認識方法[Laing, 1960→1964:30=1975:37（以下、DS と表記）]、言い換えれば「患者が治療者を含めて、彼自身と世界とをいかに体験しているかを知る」という[DS, 34=40]、患者によって主観的に抱かれた心的連関を実存的—現象学的観点から把握する営みである。

レインがヒントを得たディルタイによる解釈学（象形文字やその他の古代文字の解釈に関する議論）を引き合いにすると、より理解が進むだろう。ディルタイによると、「(象形文字の) 原著者とその解読者」という二者関係においては、象形文字に関する純粋な知的過程のみを考慮した形式的説明ではなく、それを超えた「社会的—歴史的連関」という観点から原著者ならびに象形文字の解読は進められるべきであるとされる。患者の体験や行動を「狂気＝疾病の徴候」とみなした上で形式的治療に勤しむ伝統的精神医学とは、ここでまず一線が画されることとなる<sup>2</sup>。

だが一方で、レイン自身が言及するように、この認識方法を貫徹するだけでは不十分と思われる点も存在する。

もちろん、ディルタイが語っているように文献の解読者は、歳月の経過、彼と古代の著者とのあいだの世界観の大きな懸隔にもかかわらず、原著者と全くちがった生活体験の脈絡のなかに立っているわけではない、と信じる権利がある。解読者は、世界の内に、他者と同様、時間および空間のなかでの永続的な客体として、彼自身と同じような他者とともに、存在する。まさにこの前提のゆえに精神病患者の場合を同一に論じることはできないのである。[DS, 33-34=39（以降、下線は引用者による）]

この引用文の直後に「その差異は本質的なものではない」と留意するのだが[DS, 34=39]、しかし上記のようなディルタイ解釈学への懸念はレインにとって次第に深刻なものとなる<sup>34</sup>。ディルタイに由来する‘comprehension’ という認識方法に意義を見出しつつも、それに

<sup>2</sup> この点に加えてレインは、精神分析的解釈とも一定の距離を置くというスタンスを目指している。もっともそれは、精神分析学全般を否定するといったものではなく、あくまで、防衛機制の裏を見抜いてその仮面をはぐといった暴露的方法に重点を置くそれに対する否定であった。よって（註釈4において指摘するように）たとえば「転移」という概念を、単に患者の心的状態を一方的に説明するための概念としてではなく、なぜ「転移」と解釈されるような状況が生み出されざるを得なかったのか、その根源的背景を問題とするための一ツールとして役立terるというスタンスである。精神分析的解釈およびそれを土台として発展した家族精神医学と、その中でレインの独自性に関する論考は、本論4章「総括」につながる。

<sup>3</sup> ディルタイ解釈学をめぐる詳細な考察は、本稿の問題関心からは外れてしまうため、別の機会に譲るこ

加えて、患者との間に依然として漂う世界観・時空間上の懸隔に対しても目を向けること、そしてそのような視点をも可能とする新たな認識方法を獲得することこそ、レインにとって急務であった。

(2) サルトル『弁証法的理性批判』からの摂取—‘comprehension’および‘intellection’

上記目標への手がかりは、意外にもすぐに提供される。しかもそれは、実存的—現象学的観点から内発的に生み出されたものであった。サルトルの『弁証法的理性批判』(既邦訳の部分。以下、『批判』と略記)である。

質量ともに豊富な『批判』であるが、その究極的な目標を竹内(1965)の解説に沿って端的に表すと、人間に関するあらゆる経験的諸科学を包括する一つの全体的な人間学(構造的かつ歴史的な人間学)のために、確乎とした哲学的土台を築くこと、これであった。具体的に言うと、①人間の主体的な「実践」のなかに創造的原点を有させるものであり、②その「実践」を中心にその疎外態およびそれからの回復過程までも(弁証法的循環を視野に入れつつ)同時に可知的とするような実践的・歴史的弁証法のあり方を記述し、さらにそれと並行して、③従来、実証主義的・自然科学的解釈の中に絡み取られてきた「史的唯物論」の原理を「疎外論」でもって構成しなおすものであった。

以上の狙いにあって、サルトルは二重の認識方法を設定する。まず創造的原点である「実践」という水準の只中で起こる弁証法の自己透過的認識たる‘compréhension’、そしてそれら個々の「実践」が歴史の中でさまざまに疎外され全体化されていく、より大きな弁証法の運動を捉える‘intellection’、この二つである。

ある実践が実践的有機体または集団の意図 l'intention—たとえその意図が実践主体にとっては潜在的またはぼんやりしたものにとどまっているときでも—に関係づけられる場合にはいつでも、そこに了解 compréhension が成立するのだ。ところが、批判的経験によってわれわれは、行動主体なき行動、生産者なき生産、全体化する者なき全体化、反=目的性、地獄的円環、といったものを見出すようになるだろう。…これらすべての場合において—またこれからすこしずつ見出してゆく他の多くの場合において—〈歴史の真理〉が一つではないことにでもならぬかぎり、全体化する知解がぜひ可能でなければならないのだ ou l'intellection totalisante doit être possible。一つの社会を転覆してしまうあのとりのめのない、作者のない自由な諸行動、意義をうしなってしまうながら(そしておそらく別のあたらしい意味をとるようになりながら)残存しているあの諸制度—そうしたものも全体化されるのでなければならないし、それらが進行中の歴史のなかで異物体のようにとどまっていたはならない

ととする。

4 この点については、確かに、「治療室」という共有的時空間における‘comprehension’のあり方をレインが検討しているという側面のみを切り取ると、いかなる世界観・時空間上の懸隔が「患者と治療者」との間に存在しようとも、“治療室という場においては”治療者は患者と全く同様の生活体験の脈絡のなかに存在していると感じてよいかもしれない。「転移(ないしは逆転移)」などのS.フロイトを初出とする精神分析的解釈も一助になりうるだろう。しかしながら(註釈2ですでに指摘したように)、「無意識」をも含む精神分析的解釈がもつ暴露的で一方通行的な説明的性格について、レインは反発心を抱いていたのであって、むしろ「転移」と表現されるような治療場面を患者自身が生み出さざるを得なかった根源的背景(プロセス)こそが、真に解明されるべき事柄であるのだ。レインが実存的—現象学的観点に可能性を見出そうとする理由もここにあり、また、「治療室」という枠を飛び出し、患者を取り巻く実際の家族状況を観察することへと本格化していったことも、必然の流れとしてうなずける。

し、したがって、それらも可知的なものとならなければならない。ここで、知解はより複雑となって、進行中の全体化から出発しつつ、それらのものの源泉と、それらのものの非人間性の（歴史に内在する）諸理由と、全体化する人間学へのそれらのもののありのままなる透過性とを、同時に把握することができるのでなければならない。…それゆえ私は、あらゆる実践的諸現実を全体化しうるべきかぎりでの一切の時間化的・弁証法的明証性を知解と名づけ、一方、了解という名前は、一人または多数の作者によって志向的に intentionnellement 生み出されるかぎりでの各実践の全体化的把握のために残しておく次第である。 [ibid, 1960 :161-162=1962b :82-83]

再び竹内の解説に拠ると、こうした「意図 l'intention」との不可分な関係が条件とされるこの‘compréhension’こそ‘intellection’の基礎となるのだが、同時に、後者は前者を超える。そしてこのような認識方法をめぐる二重の弁証法的運動を可能にするものこそ、「疎外論」なのであった。

ちなみに『批判』の序説という位置づけで発表された『方法の問題』(Sartre, 1960=1962)によると、‘compréhension’はとくにディルタイ解釈学から摂取されたものと記されている（「ドイツの精神科医や歴史家が〈了解〉compréhensionと名づけたものを活用する必要がある」[Sartre, 1960 :96 =1962a :157]）。しかしサルトルにおいては、「歴史のすべてが個人心理学の analogy で理解できるものと看做し、歴史理解の方法として」‘compréhension’しか想定しなかったディルタイの史的観念論的立場では不十分であった[竹内, 1965 :190]。そのため、『批判』においては‘intellection’という認識方法を新たに想定し、ディルタイの史的観念論と自身の史的唯物論との方法論的分岐点を明確に提示する必要があったのだ。

### (3) “Series and Nexus in the Family”

ディルタイ解釈学に対してほぼ同様の不十分さを感じていたレインにとって、まさにこの二重の認識方法が織り成す全体化論は摂取するにたるものであった。ここに第一の転調が経験される。1962年、レインは“Series and Nexus in the Family”（以下、“SNF”と略記）という論文を機に、『ひき裂かれた自己』では十分に扱われることのなかった「家族」という視点を重視し、その上で‘compréhension’のみならず‘intellection’という認識方法を登場させ以下のように述べる。

人間集団において、現在おこっていることを調べてメンバー内における原作者 authorship にまでたどることができたとき、それは実践 praxis と呼ばれる。そしてそれは、はるかに了解可能 comprehensible でありうるのだ。しかしながら人間の振る舞い behaviour というのは、特定の行為者の行動という観点において in terms of the deeds of any identifiable agents 直接的に了解可能なものとするには、あまりにも当人の応答性から疎外されかねないものである too far alienated from anyone's responsibility。しかしそれでもなお still、「何がおこっているか（過程 process）」ということから「誰がそれをしているのか（実践 praxis）」というところにまで段階をたどることができれば、事態は可知的 intelligible になるであろう。[SNF, 8]

いまやディルタイ解釈学を源泉とする‘compréhension’のみならず、創造的原点たる「実践」をめぐる疎外過程（ディルタイに即して言うところの世界観・時空間上の懸隔の中で経験さ

れる疎外過程)をも考慮に入れた‘intellection’の必要性(可能性)が示されることとなった。

ところで、サルトルからの摂取によって遂行されたこの第一の転調について詳細に論じられた先行研究は、筆者の見た限り皆無である。それどころか、岸田(1973)のように、『ひき裂かれた自己』からその後の一連の家族研究に至るまでの認識方法を、ディルタイ由来の‘comprehension’一辺倒のように読解しているものすら存在する。この第一の転調は、『存在と無』から『批判』にかけてのサルトル自身の転調、つまり「単に個別の実存の枠内での人間の全体性に飽き足らず、さらに個別の実存そのものを歴史と社会との全体性にまで積分して」ゆくことにより[竹内, 32]、「実存と社会とのあいだの」新たな緊張関係を追究しようと試みた[ibid]、サルトル実存主義全体にとっての大転換をそのまま体現・摂取しているものであり、決して見過ごされるべき問題ではない。

### 3. 第二の転調—家族研究の只中で経験される「意図」の処遇を起点として

#### (1) “SNF”から『狂気と家族』へ

そして何より、第一の転調を明確にしておかなければ、次の第二の転調を発見することは原理的に不可能である。第二の転調、それは‘intellection’という新たな認識方法の獲得により本格的に取り組むことが可能となった家族研究において、その只中で密かに遂行される。

“SNF”を理論的基盤として、1964年、レインはA.エスターソンとの共著『狂気と家族』を発表する。統合失調症と診断された女性患者とその家族11例に関する観察・面接記録が大半を占める本著作であるが、筆者が着目したいのは、ほんの20数ページに収められた「序文」の中に存在する、以下のテキストである。

ある人間集団において、現在おこっていることを調べて行為者 agentsは誰であるかをたどることができたとき、それは実践 praxis と呼ばれる。グループ内でおこっていることは What goes on in a group、誰もが意図的にしたものではない場合もあろう may not be intended by anyone。何がおこっているかに誰も気づいてさえいない場合もあろう No one may even realize。しかし、グループ内でおこっていることは、何がおこっているかということ(過程)から、誰がそれをしているのか(実践)ということにまでたどることができれば、可知的 intelligibleになるであろう。[Laing & Esterson, 1964:22=1971:19 (以下、SMFと表記)]

一見、前に引用した“SNF”内のテキストとまったく同じ内容として読み取れる。しかし、二つのテキストを注意深く比較すると、非常に微妙な差異が複数存在していることに気づく。以下、主要な点について順を追って羅列しよう。

①一行目、単数形で示された「原作者 authorship」が複数形の「行為者 agents」に言い換えられている。

さらに疎外過程が論じられている部分では、

②「人間の振る舞い behaviour」から「グループ内でおこっていること What goes on in a group」に言い換えられている。

③「応答性 responsibility」から「意図 intention (intended)」「気づき realization (realize)」に言い換えられている。

④‘too far alienated~’という表現が ‘may not’ ‘No one’ という表現に言い換えられている。

最後にテキスト全体を通覧すると、

⑤‘comprehension’ という語が一切使用されなくなっている。

以上五点が主な変更点として挙げられよう。

・①②について

まず、①と②について。これらからまず読み取れるのは、“SNF”においては、創造的原点たる「実践」の担い手が統合失調症患者当人(=単数形として表される「原作者 authorship」)を指示するものであったのに対して、『狂気と家族』においては、複数形の「行為者 agents」という表現からもわかるように、もはや患者当人のみならず、彼を含む家族成員全体をも指示するものとして変更されているという点である。そしてこの変更に関連する形で、疎外を初発的に経験する次元として描かれるのが、「人間の振る舞い」という個別具体的事象を標榜するものから、「グループ内でおこっていること」という抽象的全体的事象を標榜するものへと変更されることとなる。

上記のような対象の“拡大”は、サルトルの全体化論を忠実に継承した部分としてむしろ好意的に受け止められるべきではないかと思われる。先に引用したサルトルのテキストを振り返ると、‘compréhension’ という認識方法は、「ある実践が実践的有機体または集団の意図…に関係づけられる場合にはいつでも」成立するもの、言い換えれば「一人または多数の作者によって志向的に生み出されるかぎりでの各実践の全体化的把握のために」設定されたものであった[Sartre, 1960 :162=1962b :82-83]。つまり、必ずしも単数の実践者ばかりが想定されるのではなく、複数の実践者による「実践」の創造的な有り様までもが、可知性の対象として想定されるのである。

ところでサルトルの全体化論においては、その創造的原点たる「実践」が単数の実践者によるものであろうと、あるいは複数の実践によるものであろうと、それが「意図 l'intention」というモメントと不可分であることにはいささかの変わりもないことに注意しておこう（「実践的有機体または集団の意図」、「志向的に intentionnellement」生み出されるかぎりでの各実践）。「意図」というモメントは、「実践」がもつ「創造的性格」に密着するものであって、「実践」の担い手の人数によってその存在の有無が左右されることは決してないのである。

・③から⑤について

ところがこの「意図」をめぐるサルトルの定式は、次の③から⑤にかけての変更を機に、レインが想定する全体化論においては微妙に変化する。

“SNF”においては、‘comprehension’ という語が実際に使用されることもあって、創造的原点たる「実践」が自らの「意図」に強く関連づいているものとして読み取ることが容易に可能である。このことは、疎外過程が論じられる部分において「応答性」という語が使用されている点とも密接に関連していると筆者は考える。ところで筆者はここに、サルトルの全体化論をそっくりそのまま継承するのではなく、独自の全体化論を打ち立てんとするレインの狙いの萌芽を見ることができる。それは、「応答性」という反省的次元こそを「実践」との関連性における疎外の影響をまざまざと経験するものとして据えることで、「意図」

という前反省的次元ともいふべき素朴な自発的モメントはその疎外の影響から可能な限り遠ざけられる、といった論の展開である。そういった独自の展開がなされることによって、疎外からの回復という事態を想定する際、「実践」と「意図」との根源的な結びつきという回復状態を真っ先に思い起こさせることとなるのだ。

また、‘too far alienated’ という表現も注目に値する。この表現がなされることによって、いわば“完全無欠な”疎外状況が想定されているわけではなく、‘comprehension’への道が決して閉ざされてはいないということ、より正確に言えば、“困難かもしれないが、(‘intellection’という認識方法を通じてならば)決して不可能ではない”といった希望的観測を予感させるものとして、疎外からの回復、ならびに‘comprehension’と‘intellection’との間に横たわる循環的關係性を強調することになるのだ。

そうしたレインなりの論の展開（素朴に“言い回し”と表現したほうがよいかもしいが）を確認したうえで、『狂気と家族』へと目を移そう。まず、‘comprehension’という語こそ実際には用いられていないものの、全体的な文意から、創造的原点たる「実践」への追究をその主眼とする‘comprehension’という認識方法の可能性はしっかりと内包されているように見える。しかしながら、疎外過程が論じられている部分に注目すると、“SNF”においては「応答性」という反省的次元こそが疎外の影響を経験するものとされていたのだが、『狂気と家族』においては、「意図」「気づき」という次元へと密かに移行されているのである。つまり、疎外は反省的次元を突き破り、前反省的次元へと遂に到達してしまっているのだ。

さらには、“SNF”においては‘too far alienated’と表現されていたのに対して、『狂気と家族』では‘may not’ないし‘No one’といった強い否定形が用いられていることも見逃してはならない。「意図」「気づき」という表現への移行に加えて、この強い否定形が疎外過程を論じる際に使用されることにより、‘comprehension’の醍醐味たる「意図」への遡及がまるで完全に道を断たれてしまったような印象を、われわれに抱かせはしないだろうか（‘comprehension’という語が一切使用されなくなったのも、ここに理由があるのではないかとさえ感じられる）。あるいはより厳密に言うと、『狂気と家族』のテキストは（“SNF”を基礎としているということから）、「意図」と結びついた「実践」を創造的原点において想定しているとも読めるし、同時に、もはや「意図」とは根本的に結びついていない「実践」を想定しているとも読めるのである。

#### ・二つの観点の総合

以上二つの観点を総合すると、以下のようになる。

レインが想定する全体化論は、“SNF”においては“統合失調症患者当人の”「実践」（つまり単独者による「実践」）が中心に置かれ、しかもそれは「意図」との結びつきを所与とするものであった。一方『狂気と家族』においては、患者当人の「実践」のみならず、“家族成員全体によって担われる”それ（つまり“複数の人間による”「実践」）をも標榜するものであるのだが、しかしそれは「意図」との結びつきがきわめて不明確な「実践」である。つまり、患者当人という単数形から、当人を含む家族成員という複数形へと「実践」の担い手が拡大すると同時に、（それに反比例するような形で）「意図」と「実践」との創造的水準における結びつきがきわめて不明確となるのである。これが、筆者が指摘したい第二

の転調の内実である。

## (2) 創造的次元における無効化という欺瞞性

さて、なぜこのような（不明確さを内包した）転調をレインは経験することになったのか。レインの関心が統合失調症患者を取り巻く家族研究であることに立ち返りつつ、その真意を見出したい。

ひとえにこの転調は、統合失調症患者を取り巻く家族がもつ“根本的な欺瞞性”というものを暗に表現するためのものであったと考えられる。それは、‘comprehension’を基礎としつつそれを超越する‘intellection’という認識方法に対して、その有効性を“創造的次元において”すでに無効化するものであり、かつそのように無効化するものであるにもかかわらず“外的には”まるで有効であるかのような印象を持たせるといふ、二重の欺瞞性を指摘するものであったと筆者は考える。

創造的次元における無効化とは何か。それは、創造的原点であるはずの「実践」（つまり‘comprehension’）の領野においてすでに「意図」との根源的断絶を患者本人に刻印しようとするものである。より厳密に言うと、患者本人に対して、「意図」を持った単独の「実践」を担わせる機会をそもそも剥奪し、ことごとく家族成員全体によって担われる集団的「実践」という領域へと併合しようとする。一度この集団的「実践」へと併合されてしまえば、仮にその内部から患者本人による「意図」を持った単独的「実践」が発動されそうになっても、（註釈5においても指摘しているように）その可能性はむしろ集団的「実践」を永続的なものにするための栄養素としてさらに搾取・逆利用されてしまう。患者本人が単独の「実践」を発動しようとするほど、逆説的に、ますます集団的「実践」の側が肥大化するのだ<sup>5</sup>。

<sup>5</sup> 患者本人をも巻き込む形で、家族成員全体が「意図」との断絶を所与のものとする集団的「実践」を運営するという状況は、レイン自身によって発案された‘nexus’（あるいは‘family nexus’）という集団概念とほぼ一致する内容ではないかと筆者は考える。しばしば「連鎖」（あるいは「家族連鎖」）と訳されるこの概念は、サルトルの「溶融集団」および「誓約集団」という集団概念からヒントが得られており、統合失調症患者を抱える家族集団が総じて保持していると思われる基礎的特徴である。

サルトルにおいて「溶融集団」および「誓約集団」は、「〈無力さ〉の規定をもつ惰性的な人間関係、私のどんな行為もここでは他者化された行為となってしまう〈回帰〉的構造」をもつ「集列体」とよばれる疎外的集合態から[竹内, 1965:124]、「実践的分野の物質性を自由な共同実践の手中にふたたび収めようとする」べく変貌した結果としての集団概念の一種である[ibid, 131]。「溶融集団」的時空においては、各人は「『主宰者の組織者』としての発意性と責任感に基づいて行動」し[清, 2004:161]、さらに次の「誓約集団」の次元に達すると、各人は「互いに誓い合ってこの集団の絆を維持しなければならないと感じだす」[ibid, 166]。要は、「溶融集団」および「誓約集団」においては、「再び集列体へと変質し転落する必然性をおのれの体内で養うことに」なりつつも[ibid, 157]、「発意性」「責任感」といった表現に代表されるように、各人の共同実践における「意図」「責任性」というモメントが強く語られる集団形態なのである。

では一方、レインは‘nexus’という概念を形作る際、そこからいかなる摂取を試みたのか。まず当概念がはじめて登場する“SNF”を確認してみると、‘nexus’は「『共同目的』も組織的または制度的構造等もない」ようなグループが「すべての他者を相互に内面化することでその統一を達成しようとする」ために必要とする「一種の『セメント』としての一次的機能」と定義される[SNF, 11]。そこでの「最も高い倫理法則は相互的な関心」であり[SNF, 13]、「相互に忠誠を捧げあうこと、死に至るまでの友愛を誓うこと」が安定性のための必要不可欠な要素となる[SNF, 12]。さらには、‘nexus’が瓦解・消滅しうような危険ですら、逆説的に‘nexus’それ自身を永続的に維持させるための手段となりうる。つまり、危険があるからこそ‘nexus’への凝集性は高まるのだ。そうした危険は、「反乱と革命のコンテクスト」において一連の集団論を描いたサルトルとはちがひ、ただ単なる外的な危険のみを想定しているわけではない。「もし外部に危険が全く存在しないならば、危険と恐怖が（内的に：引用者補足）捏造され、かつ維持されなければならない」[SNF,



話はここで終わらない。この創造的次元における無効化と同時並行する形で、“外的には”あたかも‘comprehension’およびそれを基礎とする‘intellection’という認識方法が可能であるかのように印象付けるといふ、二つ目の欺瞞の存在が指摘されるのだ。『狂気と家族』の引用テキストが、「意図」と結びついた「実践」を想定しているとも読めるし、同時に、「意図」とは根本的に結びついていない「実践」を想定しているとも読めることを思い出そう。読解可能性をめぐるこの両義的性質の真意、それは、内実としては上述のような創造的次元における無効化が患者当人に対して不断に行われているにもかかわらず、“外的には”（つまり治療者を前にしては）患者当人の創造的原点たる「実践」および「意図」への遡及が“あたかも”可能であるかのように見せる、といったさらなる欺瞞性が、家族全体を通じて発せられているということではないだろうか。分析者（治療者）は、レインによって記された「…可知的 intelligible になるであろう」という希望的観測をむしろ反語的表現として受け取り、この（いわば隠された）欺瞞性をまずは慎重に攻略せねばならないのだ。

#### 4. 総括

以上、『ひき裂かれた自己』を出発点とする二つの理論的転調が、レインが統合失調症患者を取り巻く「家族」全体を研究対象とする只中において経験されていたことを確認した。とりわけ第二の転調は重要度が高く、サルトル全体化論が所与のものとした、あるいは『批判』という著作全体を通じてその機能を担保しようとした「複数の人間による意図的＝志向的实践」という契機に対して<sup>6</sup>、根本的なメスを入れんとするものであった。それは「複数の人間による実践」という契機が逆手に取られることによって、むしろその創造的次元においてさえ「意図」をめぐる根本的な疎外の魔の手が侵入しようということ（‘nexus’という集団）（第一の欺瞞性）。さらには、それにもかかわらずあたかも“外的には”患者

---

12]。レインは、こうした「幻想的な共同性に必死にしがみついた「ネクサス的な家族」のありようこそ[清, 178]、統合失調症を基礎とする種々の家族病理への解明の契機としていたのである。

まず、‘nexus’がもつ「発生期における原初的な集団」的性格は「溶融集団」から[清, 2004:177]、そして「相互的な関心・忠誠」を安定性の基礎としている点は「誓約集団」から、それぞれ引き継がれたものと思われる。その上で「危険」の発露を、外的に経験されるそれに限定することなく、むしろ内的に捏造されるそれとして捉えている点が、レインの独自の撰取といえるだろう。

そして最大の問題は、こうした原初的＝創造的性格を持つ‘nexus’が、果たして「意図」というモメントと結びついているかという点である。『狂気と家族』の中では以下のように述べられている。

「われわれはこのネクサスを構成している人々、その関係、そしてネクサスそれ自身を研究している。このネクサスは、メンバーによって意図されたものでなくともよく not necessarily intended by its members、メンバーの知識から予想できるものでなくともよく nor necessarily predicable from a knowledge of its members、ただシステムとしての構造と過程と効果とを備えていなければならないのである。[SMF, 21=17]

付け加えると、創造的性格を持つにもかかわらず「意図されたものでなくともよく」この‘nexus’という集団は、同じくレインによって概念化された‘series’（これはサルトルの「集列体」に由来する）と比較してみると、「意図」というコンテクストにおいては特段差異のない集団概念となっている。つまり‘series’という疎外態からの回復状態として‘nexus’を位置づけることはできないのである。

<sup>6</sup> 『批判』全体を通じてのサルトルの狙いについては、北見（2010）による以下の文章が、そのことを端的に表すものであろう。『弁証法的理性批判』を力の理論として読む、このことから次のことが明らかになろう。一方に『他者』の力が自己破壊の力としてある。他方に『同等者』あるいは共同の実践の力があり、この力が我々の言葉で言う「複数の自律」、複数の生命を支える力として機能する。そしてこの二つの力のせめぎあう地点に、「過程—実践 praxis-processus」が、そして国家をはじめとする諸制度が、あるいはレヴィ＝ストロース言うところの「構造」が成立する…そして「複数の自律」の力を支える理性もまた粗描されている」[北見, 2010:96]。

当人の意図的な「実践」に遡及可能であると見せかけようとするといった、第二の欺瞞性が付け加わること。統合失調症患者を取り巻く「家族」がもつこの欺瞞性を発見することは、遡って、サルトル全体化論を摂取することなしには、実現不可能であったのではないかと筆者は考えている。すなわち、仮に史的観念論を発想の母体とするディルタイ解釈学をそのまま追究しつづけていたところで、上記発想には到達しえなかったのではないか。

#### (1) サルトル全体化論に対する投げ返し？

いずれにせよレインによって経験されたこの転調は、翻って、サルトル全体化論に対して（さらには実存主義、現象学的存在論全体に対してと言ってもよからう）さらなる飛躍の可能性を試すものでありえたと筆者は考える。つまり、創造的原点たる「実践」においてさえ「意図」をめぐる根源的疎外の可能性（危険性）が指摘されるとき、それでもなお、全体化論はその状況を打破しうるものでありえたのか。統合失調症患者を取り巻く「家族」がもつ「欺瞞性」を前にしてもなお、その「欺瞞性」を解消し、創造的原点たる「実践」を掬い出す可能性を持ちえたのだろうか。

このサルトル全体化論に対する投げ返しは、「反精神医学」運動への合流によって明確な形でなされることなく終わってしまった印象である。もっとも一連の政治学的発想（Laing, 1967=1973, 1971=1978）が、「疎外からの人類全体の解放」を目指す「解放の弁証法」そして「反精神医学」運動の基礎体力とされたこと、そしてそれが、結局は「精神医学的実践」という範疇を完全に脱却するものでは原理的にありえず、さらには「疎外（論）をめぐるアポリア」を前に挫折するしかない運命にあったことは、一方で事実として真摯に受け止めるべきではあるのだが。

しかしながら、いまやわれわれはレインと「反精神医学」運動との接点ではなく、むしろ差異に注目すべきではないかと思われる。「人間はその原本的な可能性から疎隔されている」[Laing, 1967:11=1973:4（以下、PEと表記）]、あるいは「われわれがこの世に生まれおちたときから、そこには疎外がわれわれを待ち受けている」[PE, 12=5]といった口ぶりで始まる『経験の政治学』においてさえ、一方で「疎外からの脱却 de alienated」というテーゼ、そしてその脱却過程への「気づき」の可能性を指摘する部分が存在する（たとえば[PE, 30=32]など）。アポリアな状況が示される中での「脱却」のあり方を、再び全体化論でもって見出しえないかと問い返す態度こそ、とりわけ第二の転調を通じてレイン自身によって暗に表現されたものであった。「可知的になるであろう」という記述が、反語ではなく、再びその字義通りの意味を獲得するために、全体化論は有効でありつづけたのだろうか。

#### (2) 家族精神医学を標榜する治療者という観点

（サルトル）全体化論に対する意義深い投げ返しであったと同時に、レインが経験した転調は、統合失調症をめぐる家族精神医学全般においても、独自の地平を切り開くものであったと筆者は考える。

第二次世界大戦後、統合失調症に関する家族精神医学の動向は、「統合失調症因性の母親 schizophrenogenic mother」（フロム＝ライヒマン）や「全体としての家族 family as a whole」などといった標語とともに本格化する。1950-60年代になるとピークを迎え、G.

ベイトソンらの「二重拘束 double bind」仮説、T.リッツらの「世代境界の侵害 violation of generation boundary」という説、L.C.ウィンらの「偽相互性 pseudo-mutuality」仮説などといった、現在もなお古典としての価値を失っていない代表的な学説が登場した。これらの学説はもともと病因論的仮説として生み出されたものであるが、同時に、その後に隆盛をきわめる家族システム論の萌芽を持つものでもあった。

こうした隆盛期の中で筆者が注目したいのは、統合失調症をめぐる家族精神医学という視点が、もともとは精神分析的な方法論およびそこから得られた知見をベースとしているという点である<sup>7</sup>。つまり、正統的な精神分析的研究によって再構成された、患者がもつ内面的家族像およびそこへの（幻想的な）かかわり方が、果たして現実の家族内対人関係と一致するものであるかどうか。元来ミッシング・リンクが支配していた、現実の家族という外的「環境と内面的思考との構造的一致」というものを明らかにすることができないか[藤縄ら, 1982:5]。こうした気運が一気に立ち上がる形で、家族精神医学は本格化したのであった。

レインが経験した二つの転調は、この気運を一方で共有するものでありつつも、また他方で、それを超越せんとする気概によって成し遂げられたものでもあったと筆者は考える。ディルタイ解釈学を出発点とし、そこにサルトル全体化論を摂取することで遂行された第一の転調は、「構造的一致」というアナロジー性を発見することに満足するのみならず、そこからいかに患者当人の独自の「実践」の契機を抽出することができるかを模索するものであった。さらに第二の転調においては、その独自の「実践」の契機と思われるものさえ、すでに集合的「実践」という枠内において欺瞞的に生み出されたものにすぎないのではないか、言い換えれば、「構造的一致」であることの恐ろしさを逆説的に示すものであったのではないかと考えられる。

#### 《引用・参考文献》（外国語文献の引用にあたっては、必ずしも各訳文に従っているわけではない）

Boyers, R. & Orrill, R. (ed.), 1971, *R.D. Laing & Anti-Psychiatry*, Harper & Row Publishers.

Cohen, D., 2004, *Psychologists on Psychology*, Hodder & Stoughton. (=2008, 子安増生監訳, 三宅真季子訳, 『心理学者、心理学を語る——時代を築いた13人の偉才との対話』, 新曜社.)

Cooper, D. G., 1967, *Psychiatry and Anti-Psychiatry*, Tavistock Publications. (=1974, 野口昌也・橋本政雄訳, 『反精神医学』, 岩崎学術出版社.)

——, 1971, *The Death of the Family*, Allen Lane. (=1978, 塚本嘉壽・笠原嘉訳, 『家族の死』, みすず書房.)

Cooper, D. G. (ed.), 1968, *The Dialectics of Liberation*, Penguin Books. (=1970, 由良良美他訳, 『解放の弁証法』, せりか書房.)

藤縄昭, 新宮一成, 1982, 「精神分裂病の家族研究に関する方法論的展望」, 『講座家族精神医学2』, 1-78.

Howarth-Williams, M., 1977, *R.D. Laing: His Works and its Relevance for Sociology*, Routledge.

笠原嘉, 1976, 「レインの反精神医学について」, 『臨床精神医学』, 5(5): 675-682.

<sup>7</sup> S.フロイトによる「ハンス少年」事例などが挙げられよう。

- 岸田秀, 1973, 「一人称の心理学——レインの主観的精神病理論」, 『現代思想』, 1(7): 174-180.
- 北見秀司, 2010, 『サルトルとマルクス1——見えない『他者』の支配の陰で』, 春風社.
- 清真人, 2004, 『実存と暴力——後期サルトル思想の復権』, 御茶ノ水書房.
- Kotowicz, Z., 1997, *R.D.Laing and the Paths of Anti-Psychiatry*, Routledge.
- Laing, R. D., 1960, *The Divided Self: An Existential Study in Sanity and Madness*, Tavistock Publications. →1964, Pelican Books. (=1975, 阪本健二・志貴春彦・笠原嘉訳, 『ひき裂かれた自己——分裂病と分裂病質の実存的研究』, みすず書房.)
- , 1961, *Self and Others*, Tavistock Publications. (=1975, 志貴春彦・笠原嘉訳, 『自己と他者』, みすず書房)
- , 1962, “Series and Nexus in the Family,” *New Left Review*, 15: 7-14.
- , 1964, “Schizophrenia and the Family,” *New Society*, 16 April: 14-17.
- , 1965, “Mystification, Confusion and Conflict,” Boszormenyi-Nagy, I. & Framo, J. L. (eds.), *Intensive Family Therapy: Theoretical and Practical Aspects*: 343-363.
- , 1967, *The Politics of Experience and the Bird of Paradise*, Penguin Books. (=1973, 笠原嘉・塚本嘉壽訳, 『経験の政治学』, みすず書房.)
- , 1968, “Metanoia: Some Experiences at Kingsley Hall, London,” Ruitenbeek, H. W. (ed.), *Going Crazy*, Bentam Books. (=1975, 山口節郎訳, 「メタノイア——キングスレイ・ホール(ロンドン)でのいくつかの経験」, 『現代思想』, 3(7): 164-172.)
- , 1971, *The Politics of the Family and Other Essays*, Tavistock Publications. (=1978, 阪本良雄・笠原嘉訳, 『家族の政治学』, みすず書房.)
- , 1985, *Wisdom, Madness and Folly: The Making of a Psychiatrist 1927-1957*, Macmillan. (=1986, 中村保男訳, 『レインわが半生』, 岩波書店. →1990, 同時代ライブラリー版.)
- Laing, R. D. & Cooper, D. G., 1964, *Reason and Violence: A Decade of Sartre's Philosophy 1950-1960*, Tavistock Publications. (=1973, 足立和浩訳, 『理性と暴力——サルトル哲学入門』, 番町書房.)
- Laing, R. D. & Esterson, A., 1964, *Sanity, Madness and the Family: Families of Schizophrenics*, Tavistock Publications. (=1972, 笠原嘉・辻和子訳, 『狂気と家族』, みすず書房.)
- Sartre, J. P., 1960, 《*Critique de la Raison Dialectique*》, *Tome1 Théorie des Ensembles Pratiques*, Gallimard. (=1962a, 平井啓之訳, 『サルトル全集第25巻 方法の問題』, 人文書院.) (=1962b, 1965, 1973, 竹内芳郎・矢内原伊作他訳, 『サルトル全集第26-28巻 弁証法的理性批判I・III』, 人文書院.)
- 周藤真也, 1997, 「20世紀精神医学の経験——分裂病と精神療法をめぐって——」, 『現代社会理論研究』, 7: 187-202.
- , 1998, 「反精神医学と家族、あるいは人間へのまなざし」, 『現代社会理論研究』, 8: 65-80.
- 竹内芳郎, 1965, 『サルトルとマルクス主義』, 紀伊国屋書店.